

「コロナ禍で感じる基本の大切さ」

7月2日の新型コロナウイルス感染者数は660人で、前週の金曜日と比べて98人増え、全国の感染者合計は80万3,514人になった。

朝から雨が降りしきる7月3日、このような状況下、令和3年度東京都ジュニア柔道体重別選手権大会（男子）が東京武道館で開催された。

大会は無観客試合で行われ、入館者全員には、体温、発熱、喉の痛み、咳、倦怠感、息苦しさ、味覚・嗅覚異常の7項目について、2週間分の健康記録表の提出が義務付けられた。また、開会式前と試合途中、何度かに渡って試合場が消毒され、3試合毎の選手入場として密を避ける措置が講じられた。

長い間、試合から遠ざかっていたにもかかわらず、各階級で熱戦が繰り広げられた。決勝では、近藤隼斗（60キロ、国士舘大学）、田中裕大（73キロ、国士舘大学）、藤永龍太郎（90キロ、国士舘大学）、グリーンカラニ海斗（100キロ、日本体育大学）の各選手が見事な一本勝ちで優勝した。また、延長戦にもつれ込む試合も多数あり、各選手の活躍ぶりに感動した。勝ち負けにはコロナ禍における「基本」練習の差が出たとも考えられる。

本大会の参加者は15歳から20歳の若者である。優勝者以外は全て負けを経験したわけだが、そこから何かを学び取って欲しい。そもそも、「負ける」という言葉はそこから何かを学び「得る」ことでもある。成長過程にある若者には、勝負の結果にとらわれずに、負けから何を学んだのかをじっくり考えていただきたい。

大会の途中、1階のトイレに行った。入り口で1人の選手が身をかがめて、トイレの履物を一つ一つ丁寧に並べていた。その後姿を見たとき、柔道を始めた頃のことを思い出した。父から、「柔道を始めたからには、挨拶をすること、履物を揃えること、そうした『基本』をしっかりとすることが大切だ。」と教えられた。

トイレから戻って、その生徒が所属する学校の指導者に、トイレでの出来事を話した。すると、その先生が「その生徒が立派な社会人になることを願っています。」と返事があった。指導者の姿勢の「基本」を教えられた。コロナ禍だからこそ、「基本」が大切である。

大会終了後、外に出ると、雨はやんでいた。新型コロナの感染が1日も早く終息することを強く願うとともに、本日の大会に参加した全選手が、さらに成長することを期待している。私自身、初心に帰って、「基本」を大切にしながら、1日1日を過ごしていきたい。今日は、「基本」がいかに大切かを感じる1日となった。

（広報副委員長 大坪宏至）